

# 太宰治『満願』論

—— 話法とコントについて ——

木 股 知 史

1

太宰治の『満願』は、砂子屋書房から刊行された雑誌『文筆』（昭和十三年九月一日発行）の「短編小説集」に掲載された。その後、砂子屋書房から刊行された『女生徒』（昭和十四年七月二十日発行）の巻頭作品として収録された。砂子屋書房の主である山崎剛平は、『女生徒』ができたとき、太宰が「室に入って」あげた「第一声」が『満願』は砂子屋のために書いたものだから——<sup>(1)</sup>であり、『満願』を「一冊の柱とする一篇『女生徒』を措いて、敢えて巻頭に置いたことが砂子屋書房への寸志だった」と述べている。

本稿は『満願』について、その話法の特徴と、表現史上におけるコントとの関連という二つの点から考察を加えるものである。

2

『満願』の冒頭は「これは、いまから、四年まへの話である。私が伊豆の三島の知り合ひのうちの二階で一夏を暮し、ロマネスクといふ小説を書いてゐたころの話である。」となっている。語り手「私」の記述は、太宰自身の年譜と照応しているが、本稿ではテキスト全体は構成されたものと見なす。テキストが現実の模写であるということ的自然化している状態を作り出し、<sup>(2)</sup>（ vraisemblance ）

を演出する手法が使われている。

酔って自転車に乗り裸に負傷した「私」は、医者の治療を受ける。「西郷隆盛」に似た医者も酒好きで、「私」は単純な「善悪二元論」の思想にも共感し打ち解け、医者の妻とも親しくなる。「お医者の家では、五種類の新聞をとつてゐた」ので、「私」は毎朝散歩の際にそれを読むのが日課のようになる。そこで、「単服に下駄をはき、清潔な感じ」の「薬をとりに来る若い女のひと」を垣間見る。医者が玄關先まで見送って、その若い女性に「奥さま、もうすこしのご辛棒ですよ。」と「大声で叱咤する」のを「私」は聞くことがある。

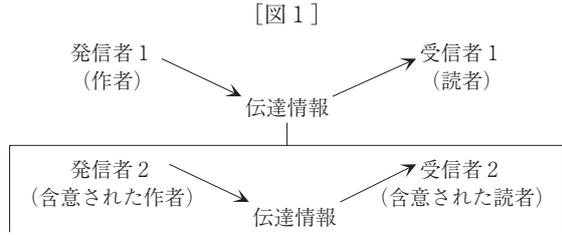
「お医者のお奥さんが、或るとき私にそのわけを語って聞かせた」が、その部分は次のように表現されている。

小学校の先生の奥さまで、先生は、三年まへの肺をわるくし、このごろずんずんよくなつた。お医者是一所懸命で、その若い奥さまに、いまがだいじのところと、固く禁じた。奥さまは言ひつけを守つた。それでも、ときどき、なんだか、ふびんに伺ふことがある。お医者は、その都度、心を鬼にして、奥さまもうすこしのご辛棒ですよ、と言外に意味をふくめて叱咤するのださうである。

単純な表現に見えるが、小説中の談話は複雑な構造をもっている。引用の部分は、語り手の「私」に「お医者のお奥さん」が伝えた談話を「私」がまとめて、要約したというかたちをとっている。「ことがある」や「ださうである」という文末は、伝

聞であることを示している。「お医者」は一所懸命で、その若い奥さまに、いまだいいのところと、固く禁じた。」という一文は、「お医者のおさん」の語りを客観的な視点からとらえたものであるが、「いまがだじのところ」という「お医者」の言葉は、自由間接話法的に三人称の語りの中に埋め込まれている。

ジェフリー・N・リーチ、マイケル・H・シヨート『小説の文体』は、小説の中で展開する談話の様相について分析している。小説における談話は、実際の日常のものとは違って実用性のないものである。小説の中の談話分析において、発信者である作者と、受信者である読者を実在するものと見なしてとらえがちであるが、リーチ、シヨートは、図1のような二層構造を小説内の談話の伝達過程を示すものとして提案している。<sup>(2)</sup>リーチ、シヨートは、「二つの談話レベルの間で生じうる合体が、これから詳しく述べてゆく問題の全般的原則となる。」と述べ、「文学的談話は、さまざまなレベルで同時に機能する可能性」があり、「読者は異なったレベルが合体していることを既定事実として想定する」と指摘している。<sup>(3)</sup>

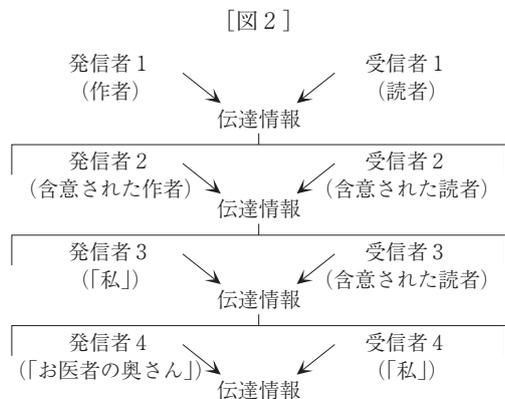


リーチ、シヨートは、「含意された作者」と「含意された読者」の間の伝達に小説中の談話の帯域を設定し、多層的な小説の言語のやりとりを可視化している。  
さて、三谷憲正は、先に引用した段落について次のように述べている。<sup>(4)</sup>

地の文に溶かし込まれている「お医者」の「奥さん」の話は、どこが登場人物「奥さん」の言葉で、どこまでが物語の語り手の言葉なのか不分明に仕組まれている。つまり、「そのわけをかたつて聞かせた」内容がただ単に「」抜きの間接的な語りであるのなら、それまで使われていた「お医者」は、「奥さん」の視点から「主人」あるいは「夫」と呼ばなければならぬはずである。にもかかわらず、「お医者」とあるのはここに語り手の立場が流入しているからで

あろう。

語り手の言葉と登場人物の言葉の境界が不分明であると、三谷は指摘しているが、こうした手法は日本語の小説ではよく見られるもので、談話の多層性の視点に立てば、事態を明晰に把握することができる。語り手の「私」は、「お医者のおさん」の談話を要約して伝えており、直接話法の引用をしているのではない。「お医者」という語は、直接話法を間接話法に言い換える際に現れたというべきである。リーチ、シヨートが言う「二つの談話レベルの間で生じうる合体」が起こっているのである。「私」の語りには、「お医者のおさん」の声を感じとれる。さらに、間接話法的な「お医者のおさん」の言葉には「奥さま」の声を感じとれる部分も混じっている。この段落の談話について、談話の多層性を可視化するリーチ、シヨートの図を応用すれば、図2のようになるだろう。



リーチ、シヨートの分析を踏まえ、英語小説の日本語への翻訳における話法のはたらきについて考察した伊原紀子『翻訳と話法 語りの声を聞く』は、「日本語の小説では語り手のデイスコースである地の文であっても、登場人物に視点が移行して直接話法スタイルで話したり、語り手自身が主観的な評価を加えたり、読者に向かって語りかける場合が多く見られる。言い換えれば、書き言葉である小説の地の文の中に、話し言葉が入る余地が大きい。」と指摘している。<sup>(5)</sup>また、「語り手と登場人物の二重

の「声」が重なり合う」英語小説の自由間接話法の翻訳に際しては「登場人物の「声」として直接話法スタイル」で訳されることが多く、その結果「声」の二重写しという自由間接話法の効果」はなくなるが、「語り手口調で、しかし登場人物のへ今・ここ」の視点を表すデイスコースが、英語の自由間接話法と平行的な日本語

の話法表現であると考えられる」と、伊原は指摘している。<sup>(6)</sup> 伊原の指摘で興味深いのは、日本語には欧米語における自由間接話法は存在しないとしても、翻訳という契機から観察すると、日本語表現に特徴的である、語り手の地の文における登場人物の「声」の溶かし込みが、欧米語の自由間接話法に「平行的」だと捉えている点である。橋本陽介は、「日本語の語りが人物と一体化しやすいこと」を「オーバードラップした語り」ととらえ、「語りが人物の位置に移動し、そのパースペクティブから語るか、その内面を代弁している」という理解を提示している。<sup>(7)</sup> 『満願』の語りは、伊原や橋本が指摘した重層性を、技法として駆使している。こうした談話の重層性は、人物の発話にアイロニーや屈折を付与することがある。

## 3

「私」による「医者のおさん」の話の中継によって、読者は小学校の先生の「奥さま」が、医者に夫の病気がよくなるまで、夫婦の房事を禁じられているらしいという事情を知ることになる。気になるのは「それでも、ときどき、なんだか、ふびんに何ふことがある。」という一文である。「ことがある。」という文末は、伝聞であることを示しているが、主格が「医者のおさん」なのか若い「奥さま」なのか判断に迷う。

三谷憲正は、医者と言う「言外」の「意味」とは「夫婦生活」だと理解し、明示しないことによって「通俗に流れてしまう危険性」を回避していると指摘している。<sup>(8)</sup> また、三谷は「(ふびんに) 何う」は様子をそつとのぞき見る「悪意」の「窺う」ではなく、謙譲語としてとらえるべきであり、ここでは「奥さま」の境遇を気の毒なことと拝察する、といった意味合いに理解すべき語であるはずだ」と指摘している。<sup>(9)</sup> 三谷の理解では、「お医者のおさん」が、「奥さま」が不憫に感じられることだと述べているのを伝えているということになる。

だが、「お医者のおさん」が主格だとすると、次の文の「その都度(中略)叱咤する」という部分とのつながりがたどりにくくなる。「何ふ」は「拝察する」などという意味ではなく、「奥さま」が医者に見るといふ読解の方が文の接続をたど

りやすい。「何う」には、「問う」「聞く」の謙譲語で、その動作の相手を敬う」という意味がある。<sup>(10)</sup> この箇所では、「奥さま」が目上の医者に見るといふように理解すべきである。また、三谷は、「ふびん」を「気の毒なこと」、すなわち、不憫という意味で理解しているが、これも異解がありうる。「ふびん」には、「都合の悪いこと。また、そのさま。不都合。ふべん。」という意味がある。<sup>(11)</sup> 夫婦の交渉が禁止されていることが、具合が悪く感じられているという理解ができる。医者は厳しく戒めるが、若い「奥さま」は、それでも、ときおり、なんだか具合が悪く思われて、まだだめでしょうかと医者聞くことがある、というように理解できる。「なんだか」という口語的な言い回しは「奥さま」の声を感ぜさせる。

肺結核と結婚生活については、一九三〇年代にはどのように考えられていたか。優生学に関心を寄せ、日本性学会の会長を務めた永井潜に『結婚読本』(昭和一四年一月五日、春秋社)という書物があり、通俗教養書としてよく読まれた。この書物に「結核患者の結婚上の注意」という一節があり、次のような記述が見出される。<sup>(12)</sup>

次に、結核の疑があるやうな場合ならば、信頼すべき医師の監視の下に、少くとも三年間は、病の経過を注意して、然る後に孰れかに決定するのが安全であります。更にもし不幸にして配偶者が結核に罹つた場合には、飲食・衣服・居室等に関して、出来る限りの注意を払ひ、なし得るだけの消毒を行ひ、伝染の機会を少くするやうに自他互ひに心がけなければなりません。又此の際、特に慎しむべきは性的生活であります。是れ結核患者は、往々性慾が亢進して房事過度に陥り易く、そのために病勢を増悪せしめるのみか、配偶者に感染の機会を多からしむるからであります。

観察を要する「三年間」という養生期間は、期せずして『満願』と一致している。房事の制限は、患者の病勢増悪を警戒することと、配偶者に伝染する機会を減らすために必要であると考えられている。『満願』で取り上げられた素材は、一九三〇年代の肺結核に対する認識に一致していると思ふことができる。「お医者」

が「奥さま」が持参した夫の喀痰の検査を行っていたかどうかは小説の記述からは判断できない。ここでは「奥さま」の夫は軽い結核で、自然療法による治癒を目標としていると考えるのが小説の設定に則しているとして、一応は考えておくこととした。

## 4

「私」は「お医者」の奥さん」の示唆で、「八月のをはり」に、「おゆるしが出た」直後の「奥さま」の姿を目撃する。それは「目の前の小道を簡單服を着た清潔な姿が、さつさつと飛ぶやうにして歩いていった。白いバラソルをくるくるつとまはした。」という鮮やかなイメージで表現されている。

三年、と一口にいつても、——胸がぱいになつた。年つき経つほど、私には、あの女性の姿が美しく思はれる。

あれは、お医者」の奥さんのさしがねかも知れない。

最後の一文については議論がある。「さしがね」としての「あれ」の意味をめぐっては様々な解釈が並立している。三谷憲正は「あれ」の指示内容の意味の可能性については、次の三点に要約している。<sup>13)</sup>

- ① 「お医者」の「奥さん」が「私」に語った話
- ② 「固く禁じ」るように手を回した、ということ
- ③ この若い人妻に「おゆるし」が出るように「お医者」の夫に働き掛けた、ということ

三谷は「さしがね」という表現の意味も考慮して③が妥当であるとしている。三谷は「この「奥さん」が夫の陰に回り、もうそろそろ「おゆるし」を出すように取り計らった」ととらえ、そう読むことで「善意」の世界が描出される」と指摘している。<sup>14)</sup>三谷の読解の難点は、禁止の解除は医師としての判断が必要だということにあり、医師の妻の徳憑だけで事態が動いたとは考えにくいのである。論者は①の

バリエーションとして、話だけではなく、若い奥さまの生き生きした姿を鬱屈した心情をかかえていた「私」に見せたこと、とすればよいと考える。

若い「奥さま」のふるまいについて、細江光は「セックスのお許しが出るということは、即ち夫の肺結核が全快したと言ふことであり、ヒロインの喜びもそこにあつたと読むべきである」と述べている。<sup>15)</sup>確かにそうした読解の可能性はあるが、それでは「奥さま」の「その都度」の「お医者」への懇願の意味を説明できない。また、休職中と仮定すれば、夫の職場復帰を願っているという読解もあり得るが、それでは房事を清潔さに昇華するという構造を無化してしまう。房事の解禁を求める人妻を清潔に描くという点に反転の構造の中心がある。

『満願』には、いくつか矛盾する二項対立の構造が埋め込まれている。二項対立の構造を『満願』から拾い出してみよう。

- ① 「お医者」の「原始三元論」と「私」の「愛という単一神」
- ② 子どものいない「奥さん」といとなみを解禁される「若い奥さま」
- ③ 清潔さ（新聞配達青年、簡單服の若奥さま）と若干の淫靡さ（横座りの奥さん、ささやき、解禁されるいとなみ）
- ④ 美しいものへの感動（美談）と「さしがね」（作為）

この中で、注目すべきなのは、③と④の要素である。それらは二つとも、結末の反転に関わっている。『満願』の結末では、夫婦の房事の病による禁止とその解禁という性的な要素は、清潔な美しさへの感動に反転し、その感動は自然に起きたことではなく、「お医者」の奥さんのさしがね」という作為の結果として生まれたのかもしれないとされている。

結末の一文は、『満願』の美談が成立する構造そのものを反転する暗示機能を担っている。単に美談だけではなく、美談を成立させる作為も同時に示されているのである。「さしがね」をコンテクストに拡張してみるならば、美談に読者を誘導しながら、美談の作為についても注意を喚起するという二重性を持つことが理解されるだろう。また、「さしがね」という語には小説の構造そのものへの自己言及性をも認めることができるだろう。こうした結末、オチのありかたは一九二〇年代から三〇年代にかけて流行したコントを想起させる。

コントは「短編小説の一形式。わが国では大正末から昭和初期にかけて流行した。小話、掌編などとも呼ばれた。いわゆる短編小説よりもさらに短い体裁で人生の断面をエスプリ（うがち）をきかして軽妙に描き、ウィット、ユーモア、ペース、エロティシズム、さまざまなニュアンスをとおしての人生批評を含む。大正一二年、フランスから帰った岡田三郎がこれを紹介、提唱し、その実作を示したことから流行」を見たという<sup>(16)</sup>。英語圏の一般的な文学辞典によると、*conte* は、*roman* や *novelle* とは幾分異なつた種類の物語をさすとされ、真のコントはリアリステックではなく、少しファンタスティックで、滑稽味があり機知に富んでいる傾向があり、一九世紀以降には単に短編小説のことを指すようになったともいう<sup>(17)</sup>。

大正末年のコントをめぐる論議を分析した柳沢孝子は、次のような認識を提示している<sup>(18)</sup>。

コントという短い作品では、日常茶飯の常識を越えた極端な素材の方が、強いインパクトを持てるし、印象的、効果的だという要素も考えられる。実際に、特殊な心理状態や奇怪な出来事や、死を扱ったコントは多い。あり得ないような偶然さえ、コント形式で描かれると、俗に言う運命の皮肉めいたものに見えてくる。その描写法が、単に簡潔であるばかりでなく、作品の構成やそれを構成する視点をも含めて、正攻法のリアリズム手法から外れたものでよいからである。

柳沢は、こうしたコントの主観重視の方法意識が「非常に感覚的あるいは幻想的な作品、ダダ的な手法」をも許容すると指摘している<sup>(19)</sup>。日常のスケッチのように書かれた太宰の『満願』は、こうしたコントの非日常性からは遠い位置にあるように見えるが、実はコントの形式を踏まえたものではないか。コントを書き続けた武野藤助のコント論からそのことを考えてみたい。

コントという形式は一九三〇年代には衰退に向かうが、依然としてコントを書き続け、その理論化にも熱意を持っていたのが武野藤介である。武野は、一九三五年一〇月に『コント集 誤診』（健文社）を刊行するが、発禁処分を受けた。小説、戯曲、散文詩など多様なジャンルに渡る創作方法を啓蒙的に説いた『文藝入門十四講』に、「コント講座」を寄稿した武野は、短編小説とコントの違いについて、「従来の短編小説が説明的描写で人生の一角を描いたのに対して、私の謂ふところのコントは批評的に同じ一角——人生の或る断面、縮図——を描かうと云ふのである」と述べている<sup>(20)</sup>。

武野は、夏目漱石の『三四郎』に描かれている広田先生が三四郎に語る話をコントの例として引用している。母親が臨終の際に、まったく知らない人を頼れと言ひ、理由を問うと、その人物が本当の父親だと告白された「一人の男」の話である。三四郎は「そんな人は滅多にないでせう」と述べるが、広田先生は「滅多には無いが、居る事はある」と応じる。武野は、「めつたにあり得ないが有り得ることはある」という点に「よきコントの題材」が見てとれると指摘している<sup>(21)</sup>。『文壇余白』に収録された「コント講話」でも、武野は同じ話に触れているが、「コントは「嘘を書く」といふことを、その特徴の一つとしてゐる」と述べている<sup>(22)</sup>。ここで言う「嘘」とは、あり得ないが、話としてはあり得るような極端な設定のことを指している。また、武野はこうした「嘘」、すなわちまれな設定を扱うことによって生じる「不自然さ」を解消するのが「をち」であるとも主張している<sup>(23)</sup>。

武野藤介の『コント集 壁に咲く花』に『情婦』という一編が収められている<sup>(24)</sup>。八幡様の境内に地主の寄附でブランコが設置される。昼間は子どもたちに使われるが、夜は「近所の女中どもは大急ぎで、台所のあとかたづけを済ませて、このブランコへ駆けつけて」きた。待っているのは「酒屋や米屋の子僧」である。男女がともにブランコに乗って嬌声が響き渡る。やがて「夜間の使用を禁ず」という立札が出る。落ちたタイトルにかけてあり、神社の神主が警察の意向を受けて札を出したのだが、その神主自身が「情婦にカツプエを経営させてゐた」のであった。末尾は「子僧達もブランコにはチップが要らないからね。」となっている。

子どもの遊具であるブランコが、「近所の女中ども」や「子僧」たちの性具に転

換し、表題は、神社の神主が「情婦」を囲って、「カツフエ」を経営させているという不謹慎なふるまいを示し、両者は最後のオチの「子僧達もブランコにはチツプが要らないからね。」という皮肉によって縋いあわされている。こうした「ブランコ」と神主の「情婦」という離れた二つの要素を関連づける結末のあり方は、美談を作為に結びつける『満願』にも共有されている。

太宰の『満願』のモチーフは、コントによく見られる、夫婦、男女間のエロテイックな素材に絡められたアイロニーを転倒した位置にあるが、その表現法はコントを踏襲しているのである。

注

- (1) 山崎剛平『若き日の作家——砂子屋書房記』(一九八四年三月十五日、砂子屋書房) 八四頁
- (2) ジェフリー・N・リーチ、マイケル・H・シヨート『小説の文体——英米小説への言語学的アプローチ』(二〇〇三年一月、研究社、筑摩雄監修、石川慎一郎、廣野由美子、瀬良晴子訳) 一七一頁。図1は本書の「図5・2」の引用である。
- (3) 同前、一七一頁。
- (4) 三谷憲正「太宰治『満願』試論——読解の試み」(一九九七年一〇月四日『京都語文』二号) 一九六〜一九七頁。
- (5) 伊原紀子『翻訳と話法——語りの声を聞く』(二〇一一年五月、松籟社) 一三二頁。
- (6) 同前、二二五頁。
- (7) 橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩学』(二〇一四年九月五日、水声社) 三九一頁、三九二頁。
- (8) (4)に同じ。一九一頁、一九五頁。
- (9) 同前、一九七頁。
- (10) 『日本国語大辞典 第二版 第二卷』(二〇〇一年二月二〇日、小学館) 一三〇頁。
- (11) 『日本国語大辞典 第二版 第十一卷』(二〇〇一年一月二〇日、小学館) 九九五頁。
- (12) 永井潜『結婚読本』(昭和十四年一月五日、春秋社) 二二二頁。
- (13) (4)に同じ。一九一頁。
- (14) (4)に同じ。一九二頁。
- (15) 細江光「満願論」(平成一三年六月一九日、『太宰治研究9』和泉書院) 四九頁。
- (16) 『日本近代文学大事典 第四卷』「コント」の項、執筆は保昌正夫。一五六頁。
- (17) Edited by J. A. Gaddon, *A Dictionary of Literary Terms and Literary Theory*. Fourth Edition, 1998, Blackwell Publishers Ltd. p 177

(18) 柳沢孝子「コントというジャンル」(二〇〇三年四月、『文学』第四卷二号、岩波書店) 七三頁。

(19) 同前、七三頁。

(20) 武野藤介「コント講座」(昭和二年一月十九日、金児農夫雄編『文藝入門十四講』素人社) 一七頁。

(21) 同前、二三頁。

(22) 武野藤介「コント講話」(昭和十年七月五日、『文壇余白』健文社) 二六三頁。

(23) 同前、二六六頁。

(24) 武野藤介『情婦』(昭和十一年四月十五日、『壁に咲く花』健文社) 二六〇〜二六一頁。

\*『満願』の引用は、筑摩書房版『太宰治全集 第二卷』(一九八九年八月二十五日) 所収のものによった。